

善導の乗仏願力思想

中 岡 隆 善

善導の宗教的中心思想は、かれが『観無量寿経』に説かれてあるところの真の意味を把握して、いかなる罪惡生死の凡夫といえども、称名念仏すればかならず彌陀の本願力によつて救われると主張したことにある。このことはすなわち敬善義√深信釈における徹底した機法二信の明示によつて知られる。かれの宗教的立場として、人間の罪業に対する深き反省は如来の大悲を仰ぎ、機教相應の宗教が仏願の念仏のうちに見出されたのである。ここに善導の宗教的至情がうかがわれ、またかれの宗教的自覚がみとめられる。

善導の乗仏願力思想

ところで、どうしてかれはこの觀點にたつたのであろうか。それは、かれの師である道綽の中心的教説を受けついで、新しい見地から『観無量寿経』をみなおしたところにある。すなわち、「この觀經は仏凡の為に説きて聖の為にせず」といい、また「觀經の定善および三輩の上下の文意をみるにすべてこれ、仏去世の後の五濁の凡夫なり」と述べている。あるいは淨影寺慧遠や天台智顗などのイダイケ（韋提希）夫人を大ボサツ（菩薩）とみなす説をくつがえして、善導は「まさしく、夫人はこれ凡夫にして聖に非ず、聖に非ざるによるがゆえに聖力冥加すること」と述べているごとく、イダイケ夫人はひじりの人ではなく、まったく凡夫の性をもつ人であるとして、九品の往生人もことごとく凡夫であると決定した。けだし淨土教が「凡夫の為なり」とすることは、かならずしも独り善導にかぎる説ではなかつたが、末代罪濁の凡

夫という觀念の、ことにかれにおいて強くいだかれていたことは、かれが道綽の主張した末法思想を継承したことによるものであると思う。ここにおいて、善導は人間性にもとづいた罪惡生死の人間觀をうちたてたのである。このきびしい人間批判から、善導は凡夫性をもつ人間を、そのまま彌陀の報土に往生せしめるという点を力説した。すなわち、善導がその經典の中から把握せられた核心は、まさしく凡入報土の仏意であつた。

それならば、なぜ善導は從來の諸師が許さなかつた凡入報土の説を、あえて大胆にも強調したのであるうか。それは彌陀の本願力という偉大なる救済力の証権を握られたからである。彌陀の成仏も、またその淨土の建立もみな本願力の實現に外ならない。とくに彌陀は「若不生者不取正覺」の誓をたてて、「十方衆生」の往生を条件として正覺を成じている。「無量壽經」は「唯除五逆誹謗正法」と説かれたが、「觀無量壽經」においては、下下品に至つて、それらのものの往生が許されているのである。ここに、大經と觀經の教説が一面矛盾するものものになるが、これは別の機会に述べることで、とにかく十方衆生の言葉の中には、十惡五逆のものも含まれているとせねばならぬ。ここに着眼した善導は、彌陀が五劫に思惟し、兆載永劫に修行した結果の願成就に重点をおいたことである。これによつて、容易に生れ得ないところの高妙の報土に、いかなる罪惡の凡夫といえども生れ得さすのが、かの仏の本願の力である。とみたからである。すなわち、罪業深重の凡夫が仏の願力によつて、生起せしめられることではなければならない。という善導のするどい着眼は、まったくかれ自らの嚴しい人間性の批判と宗教的実践行業のなかにみいだされた、自証というべきであろう。

かの深信釈の「阿彌陀仏四十八願をもつて衆生を摂受したもう。疑なく慮なく、かの願力に乗じて定んで往生を得」と述べる確信は、「一心に専ら彌陀の名号を念じ、行住坐臥時節の久近をとわず、念念にすてざるもの、これを正定の業となづく。かの仏の願に順ずるがゆえに」というがごときの、念仏が正定業として、往生の正因とする、まったく念仏の一行に帰結せられた。それは「かの仏の願に順ずるがゆえに」である。ここに同じく仏の本願力を強調した曇鸞よりも実践的に一步を深めた、宗教的卓越なる見解がうかがわれるのである。このことは、さきに述べた善導のきびしい人間性の批判に起因することをわすれてはならない。

いうまでもなく自力をもつて発菩提心することは、凡夫にとつては容易のわざではない。もちろん、曇鸞にあつても、発菩提心をもつて往生の因とすることは、うごかすことのできないものであろうが、仏の本願他力を主張するかぎり、凡夫の発菩提心は仏の願力によつて可能ならしめるものと思われる。すなわち『論註』巻上において述べる「仏よく声聞をしてまた無上道心を生ぜしむ、まことに不思議の至なり」という言葉は、例を声聞にとつていることではあるが、凡夫においても然りといふべきであつて、このことを述べていると思う。巻下には「仏の願力によるがゆえに十念念仏すなわち往生をう」とまつたくすでに善導の立場にたつていたようである。しかし曇鸞の場合、ここにかの仏の本願なる念仏が、そのまま往生の因になるであらうか。曇鸞はその巻下において、無量寿經に説かれる「三輩生のなかに行に優劣ありといへども、みな無上菩提心をおこさずといふことなし」と述べ、菩提心を解釈してすなわち、「願作仏心」、「度衆生心」といい、「度衆生心は衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる。こ

のゆえにかの安樂淨土に生ぜんと願ずるものは、かならず無上菩提の心をおこすなり」と發菩提心往生説を述べている。これはさきに述べた「十念念仏すなわち往生をう」という、念仏をもつてそのまま往生の因とするような言葉とは矛盾するものとなる。してみると曇鸞の見解に一定した思想がないようにみられるが、ヘーゲルがいうように矛盾は一切の自己運動の原理である。これは發菩提心が往生と同時にして、發菩提心あらしめるものが、仏の本願の不思議であると思ふものと思われる。このことはすでに曇鸞が仏願の不思議が絶対の決定力を有するものとしたことによる。すなわち卷下に「人天起すところの諸行、みな彌陀如來の本願力によるがゆえに、なにをもつてかこれをいう、もし仏力にあらずんば四十八願すなわちこれいたずらに設ならん」と述べることにより知られるのである。しかしながら、曇鸞においては、凡夫といえども往生の因はまさしく發菩提心することである。しかし凡夫は自力において容易に發菩提心することはできないから、ここに凡夫として發菩提心せしめるには、仏願力の増上縁をまたねばならぬ。ことばを換えていうならば、仏の本願力が増上縁となつてはたらいてこそはじめて往生の正因であるところの發菩提心が可能になるとみたのであろう。そしてこの見地から「乃至十念せんもし生ぜずんば」の第十八願が、すみやかに發菩提心して往生せしめんとする、彌陀の願力をあらわすものであると考へたと思われる。

このように曇鸞の發菩提心正因説を理解するとき、善導は、ついに菩提心正因説をすてて、あえて念仏正因説を主張することができた。それはもとより念仏がかの仏の願に順ずるがゆえにとしたことによる。このことはさきに述べたごとく、『觀無量壽經』に説かれる真の意味を

把握して、罪業深重の凡夫が仏の願力によつて生起せられるものでなければならぬ、自力をもつて発菩提心することはとうてい不可能であるという、自からの深い内省によつたことと、この曇鸞の発菩提心正因説が、究極するところ自力の発菩提心にあらずと考へたことにもその力強さを感じたのである。されば、善導の仏願力思想は、そうした曇鸞の思想を実践的に確立したともいえるようか。ここに善導の思想が、曇鸞相承によるものであるといわれるゆえんがあると思う。一は道綽の主張する末法思想の影響をこうわり、根底的に觀經をみなおし、一は曇鸞の強調した仏願他力思想にかられて、觀經をとおして大經に説かれる彌陀の大悲たる本願の念仏に、帰一せしめたところに、いかなる罪惡の凡夫といえども、かの阿彌陀仏の願力に乘じて、その報土たる淨土に往生することが出来ることを決定づけたのである。その往因は阿彌陀仏の本願たる称名念仏することによつて、乘仏願力往生が得られるのである。「上來定散兩門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば意衆生して、一向に彌陀仏の名を称せしむるにあり」というがごとき、四帖疏全般に流れるものは念觀廢立の思想であり、往生礼讃（後序）に「かの仏いま現に世にましまして成仏したもう、まさに知るべし本誓の重願むなしからざることを、衆生称念すたばかならず往生をう」と述べ、本誓の重願と念仏、そして玄義分における「一切善惡の凡夫生ずることをうるはみな阿彌陀仏の大願業力に乘じて増上縁となさずということなし」という、善導の乘仏願力思想は、念觀合論の曇鸞や道綽の上にたつて、その思想的立場をより実践的に展開し確立せしめたところの、凡入報土思想と称名正定業思想の基盤となるものである。

ここに一言つけ加えておきたいことは、このような善導の願力思想が、曇鸞や道綽と同じく、大乘仏教の般若・方便の思想に立脚していることである。すなわち玄義分／序題門Ⅴにおいて、「ひそかにおもひみれば、真如廣大にして五乗をもその辺りをはからず、法性深高にして十聖もその際をきわめることなし。真如の体量と量性とは麤麁の心をいえず、法性の無辺と辺体とはすなわち、もとよりこのかた不動なり。無塵の法界は凡聖ひとしく、まどかに、両垢の如如はすなわち、あまねく含識をかねたり、恒沙の功德寂用湛然たり。ただし垢障覆うこと深きをもつて淨体顕照するによしなし」と述べる言葉は、淨土教のよつておこるところの本原としての法性真如界、寂用湛然たる存在の相、きわめて宗教的体認をもつて述べ、ここに、真如とは因縁即空の理を意味することは、あとに述べられる／二乗門Ⅴにおける、大品般若經の如化品を引用していることから知られるのである。この如化品は世間も涅槃も、ともに如化であることを示し、般若皆空の理を述べたものである。さればすでに曇鸞も論註において、この所論を往生人と法蔵菩薩の兩者に約して述べ、道綽は安樂集／菩提心釈Ⅴ・／破異見邪執Ⅴなどの釈下において、この義を述べているのである。そしてまたこのことは、知恵と慈悲、あるいは真実と不実の關係において明かされるのであろう。一は宗教的真実そのものの顕現であり、一は如来と凡夫との關係においてなされたものである。

このような鸞・綽二師の思想を基調として、そして不実の世界にこそ、如来の方便力の働く場であることを認識して、散善義／三心釈Ⅴに、誰人も首肯されるがごとき釈明を与え、凡夫の有漏雜毒の行をもつてしては、真実報土に往生することの不可能であることを説き、如来の本願力によらねばならぬことを反顯させている。したがつて善導の願力思想の主張は、かかる般若思想的絶対性空不可得因縁生の理解によつて、真如縁起論的な原理性にもとづき、しかもさらに、それを具体的に如来の大悲本願力を三緣五緣として、その救済力を称名念仏の一行に帰結せしめていることである。